様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２５５３

研究課題名（和文）フランス写実主義文学と「幻視」の系譜

研究課題名（英文）French Realism and the genealogy of vision

研究代表者
橋本　知子（Hashimoto, Tomoko）

立命館大学・文学部・非常勤講師

研究者番号：６０６２５４６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：　フロベールおよび19世紀前半の文学者たちが、幻覚、綺想、幻影といった不可視のイメージをどのように描いたかを考察する。実証主義の台頭にともなって、文学者たちもまた科学的なものの見方に影響を受けるようになったが、しかし主観性がもたらす創造力にも重きを置いていたのだった。理性と理性にあらざるもの、合理性と非合理性、悟性と感覚などが綯い交ぜとなる様が、この時代の作品に現れる。またロマン主義から写実主義への過渡期に注目し、幻視の表出の様相を見ると同時に、文学作品がどのように科学言説を支柱としつつもそれを変容させているかを分析する。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　19世紀フランスは科学主義の時代であった。合理的精神により、客観性を重視するものの見方が主流となったこの時代において、文学作品には、科学の対局にあるような諸現象（幻影、綺想、錯覚、妄想、幽霊、幻影など）が多く描かれもした。こうした逆説性を、時代背景および作品読解によって分析した。また、異なる文学潮流の間で、科学言説からの影響のあり方を比較検討し、それぞれの作家の独自性を示すと同時に、文学史上は区分されている作家間で共通性が見られる点について明らかにした。

研究成果の概要（英文）：My research consists of an analysis of how Gustave Flaubert (1821-1880) and other French writers of the first half of the nineteenth century seized upon concept of the invisible as in hallucinations, illusions, phantoms and fantasy. With the emergence of Positivism, these writers were greatly influenced by the scientific point of view, but they also took into consideration the power of religious ecstasy, creative imagination and individual inner sensations. The mixture of rationality and irrationality is an integral part of their narratives as well as descriptions. The analysis also focuses on the transitional stage from Romanticism to Realism, which were the two major movements of the first half of the nineteenth century, in order to make clear their common features and differences. It also deals with the problems of how literary discourse stands on or modifies scientific discourse, and how writers create, using scientific knowledge, their own fictional world.

研究分野：フランス文学

キーワード：フランス文学　19世紀　写実主義

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

まず始めに学術的背景を述べると、近年フランスでは19世紀のフランス文学を幻覚という視点から論じる著書が定期的に刊行されている。重要な研究として、Jean-Louis Cabanès パリ第十大学名誉教授の Le Négatif（Classiques Garnier 社出版、2009年刊行、304p.）が挙げられる。これは幻覚という主題が19世紀中葉フランス文学においてどれほど中心的であったかを、同時代医学に照らし合わせて論じた大著である。また Jean-François Chevrier パリ国立高等美術学校教授は、L'Hallucination artistique（Arachnéen 社出版、2012年刊行、683p.）と題された著書の中で、19世紀後半の文学と美術における幻覚的なイメージの在り方の軌跡を、膨大な図版と引用によって鮮やかに描きだしている。さらに Juliette Azoulai パリ東大学准教授は、L'Âme et le corps chez Flaubert. Une ontologie simple（Classiques Garnier 社出版、2014 年刊行、622p.）の中で、フロベールにおける二元論（唯心論と唯物論）の超克について論じ、その例として登場人物の幻覚的な場面が引用されている。

また論文集としては、Image et pathologie au XIXe siècle（Paolo Tortonese 監修、Sestante Edizioni / Bergamo University Press / L'Harmattan 社出版、2008年刊、160p.）がある。これはイメージ形成とその受容を19世紀の精神医学、生理学、心理学から論じたものであり、狂気や倒錯と並んで幻覚が大々的に取り上げられている。同様に、Paradigme de l'âme. Littérature et aliénisme au XIXe siècle（Jean-Louis Cabanès, Paolo Tortonese, Dider Philippot 監修、Presses Sorbonne Nouvelle 出版、2012年刊、304p.）でもまた、魂の問題が19世紀医学との関連から論じられ、幻覚の主題が当時の議論の焦点であったことが述べられている。

以上の先行研究を十分に踏まえつつ、研究対象を主に「写実主義文学」に限定し、またその中心的主題を、「幻覚（hallucination）」ということばで表現されている事象だけでなく、「錯覚（illusion）」「幻想（fantastique）」「夢想（rêverie）」といったことばで表されている類似の事象にも対象を拡げ、それらすべてを題目にあるような「幻視」ということばで包括させることにより、より高い次元での作品分析を行うことを目標とした。このようにフランスでの先行研究を受け継ぎつつも、独自の問題提起をそこに加えることで、新たな貢献となるような研究を図った。

次にこれまでの研究成果と着想に至った経緯であるが、パリ第8大学へ提出した博士論文の題目は「フロベールにおける幻覚」であり、よって今回の研究課題は博士論文で行った問題提起を礎石としている。また平成24年度から平成26年度まで行った研究課題は、フロベールと同時代あるいはそれ以後の文学潮流とを比較するというものであり、生理学からの影響という視点から両者の相違点を明らかにした。具体的には自然主義文学を選出し、当時よくよく読まれていた批評家イポリット・テーヌからの影響をレアリスム作家と自然主義作家との間で比較検討した。

前回の研究では、フロベールと同時代あるいはそれ以降（1860-1880 年代）の文学作品に限定し、「生理学」をキーワードとして文学と科学とを対比させるものであったが、今回は研究対象を、19世紀前半に主流であった理論である「動物磁気」「生気論」「精神医学」といった科学の別カテゴリーに注目することにし、また吟味する文学作品も、こうした科学分野の影響を受けている時代、つまりフロベールとそれ以前という異なった時代区分に絞りこんだ（具体的には1830 -1850年代を中心とした）。

このように、本研究課題はこれまでの成果を継続すると同時に発展させた形のものであるといえる。

２．研究の目的

本研究の目的はまず、歴史的文脈に照らし合わせつつフロベールとフロベール以前の作家を比較するという巨視的見地から分析を行い、と同時に各作品における科学的言説からの影響および美学的特徴を論じる微視的見地の分析をもまた行っていくという、二方向からのアプローチである。文学作品もまた時代の様々なディスクールとの関係の中に布置されるひとつの言説であり、そのため時代背景を考慮することが重要となってくる。歴史的文脈を視野に入れることで、より広範な範囲から問題を吟味すると同時にそれぞれのテクストの精読を行う。こうした二方向から作品を分析することにより、より深く掘り下げて検討することを目指した。

また「幻視」の主題を扱うことで、本研究独自の問題設定から文学史を改めて読むことを試みた。実証主義の作家であるフロベールは、一見すると幻視と対極にあるかのように思われるが、しかし逆説的にも幻視はフロベールにおいて反復して描かれる。こうした逆説性を問うのが本研究の主たる目的である。また対照項として「フロベール以前」という時代設定を行い、両者を比較することで、ロマン主義という夢や想像力の時代から、実証主義の時代に移行するまさにその過渡期において、「幻視」がどれほど中心的テーマとなって現れているかを考察した。

さらには、同時代科学からの影響を明確化することも目的としている。夢の領域にある知覚を論じる際、ロマン主義を論じる先行研究は多い。しかしフロベールをはじめとする写実主義における幻視と、ロマン主義における幻視とを厳密に比較検討している研究は、現在のところあまり見られないのが実状である。これは両者における幻視が同一視されがちであるという、いわば誤解から生じている。前者の幻視と後者のそれには類似点があるとはいえ、しかしながらその物語機能や形式は異なっている。この差異は同時代科学からの影響の差異でもある。こ

うした決定的な差異を分析し、フロベールとそれ以前の文学潮流の相違点を明確にすることで、19 世紀前半のフランス文学を「幻視」という独自の視点から捉えなおし、文学と科学との交錯をより広い視野から捉えてゆく。

３．研究の方法

本研究は 19 世紀フランス文学における文学と科学との関係性を問うものであり、様々な年代の作品を扱うため、まずは Frantext などの文学作品データベースを使いながら、1830 年から 1850 年代にかけてのフランス文学全体の中から幻視が重要な役割を果たしている作品を選定する手順が重要となる。よって平成 28 年度の研究は、まずコーパス決定と、そこで選定された文学作品の読解を中心に行った。

幻視の場面が頻出する作品を選別するためにキーワードを決定し、そして研究題目に挙げたように、それらすべてを「幻視」という語で総称した。これは「そこに存在しないはずのものが、あたかも存在するかのように知覚される」という、エスキロルが提唱した精神医学的定義に鑑みている。

語彙検索が重要となってくるのは、ことばの使用頻度が 19 世紀フランスの医学史の流れと連動しているからに他ならない。例えば「幻覚（hallucination）」の語を例にとると、1830 年を境にして使用される文学作品数が急激に増加する。これは当時の医学において幻覚が議論の中心となった事実を反映している。幻覚は古代ヒポクラテスの時代から知られた事象であったが、中世には宗教的法悦と混同され、また文学作品においても「幻覚（hallucination）」の語が使用されることはほとんどないほどまでになる。

しかし 19 世紀に入って、主に 1830 年代と 1850 年代に医学の分野で幻覚が脚光を浴びるようになり、幻覚に関する医学書や論文が数多く出版されるようになる。1830 年以降の文学作品で「幻覚(hallucination)」の語の使用頻度が上がるのはこうした時代背景のもとにある。また、Juan Rigoli が Lire le délire (Fayard 社出版、2001 年刊、349p.)で明らかにしたように、バルザックやノディエを筆頭に 19 世紀前半の作家たちが医学を意識していたからであるといえる。こうした先行研究を元に、対象とする語を「幻覚（hallucination）」に限定せず、隣接する諸現象とそれを表す意味場および語彙場にかかわる語をも対象とし、「幻視」の主題に統合させることで、より広い視野からこの問題を分析するようにした。

平成 29 年度および平成 30 年度は、歴史的文脈に則した作品分析を行い、フロベール「以前」の作品における幻視の在り方と、フロベールにおける幻視の在り方の差異を、同時代科学からの影響という観点から、文献学的に明確にするよう努力した。こうした資料はつねに文学作品の読解と並行して、再確認しながら目を通しなおす必要である。現在はフランス国立図書館の電子図書館 Gallica にて多くの 19 世紀の文献が日本に居ながらにして閲覧可能になったが、医学研究は論文として発表されたものが多いため、オンライン上では閲覧不可であり、また先行研究の中でも、参照されている版がそれぞれ異なっている場合が多い。つまり、同じひとつの文献であっても改訂版や再版にも留意することが必要となってくる。そうした意味でも、定期的にフランス国立図書館に赴いて資料収集を行うよう心がけた。

４．研究成果

まずは幻視の様相が描かれているコーパスを確定し、テクスト分析を通してその多様性を提示した。フランス文学史に鑑みると、幻想をうたった作品には、1830 年代の幻想文学や、夢を主題とするロマン主義文学がすぐに列挙されるが、実際はそうした作品だけでなく、ジョルジュ・サンドやヴィクトール・ユーゴーといった、幻視を必ずしも主題にしていない作品においてもまた、幻視は主要テーマとして描かれている。そうしたまだあまり知られていない箇所を指摘すると共に、作品内での物語的機能、効果、意義、それぞれの作家が描く幻覚のあり方の独自性を分析した。また幻視の対極にあるかのようにみえる写実主義文学においても、実のところ幻視は水脈として続いている。こうしたロマン主義と写実主義との共通点、差異、間テクスト的影響関係などを示すことによって、19 世紀フランス文学における幻視の知られざる系譜を明らかにした。

さらに同時代の科学からの影響がどのように作品に現れているかを分析した。幻視は 1830-1850 年代の精神医学で注目を浴びた主題であるため、この時代の科学言説がどのように物語化されているかを、この時代の代表的作家、ジョルジュ・サンドおよびヴィクトール・ユーゴーを選択し、フロベールと比較した。通常、前者二人はロマン主義、後者は写実主義と分類されがちであるが、幻覚の主題においては明確な共通点がある。特に、サンドとフロベールという、異なる政治観や文学観をもった作家同士が、幻覚を描く際にはその文体が驚くほど似通う瞬間がある。そうした意外な側面を明らかにした。

以上はすべて、フランス語による学術論文という形で成果にした。掲載された学術雑誌はオンライン化され、一般公開されている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　3　件）

①Tomoko Hashimoto、 Violon, voix et《 orgie d’imagination 》. L’évocation sonore chez

Sand et Flaubert、『仏文研究』、査読有、49 号、2018、41-54。
②Tomoko Hashimoto、La cristallisation de la chimère. L’image hallucinatoire et le savoir du temps dans Les Travailleurs de la mer de Victor Hugo、『仏文研究』、査読有、48 号、2017、61-84。
③Tomoko Hashimoto、La quatrième dimension de la littérature fantastique (les années 1830) 、『仏文研究』、査読有、47 号、2016、5-18。

〔学会発表〕（計　1　件）
①橋本　知子、水底のキマイラ － ユーゴー『海に働く人々』における幻想と科学、京都大学フランス語フランス文学研究会、2017 年。

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：なし
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
Jean-Louis Cabanès、パリ第 10 大学・名誉教授
Yvan Leclerc、ルーアン大学・名誉教授
Juliette Azoulai、パリ東大学・准教授

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等に

ついては、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。